

## 復活節第3主日 エマオの弟子 ルカ 24：13～35

イエスは、不安を抱えている弟子に静かに現れ、弟子の心を燃やし、福音宣教が始まります。エマオの弟子の物語は、良き知らせ・福音を告げようとする私たちに深い示唆を与えます。

### <二人の弟子はどのような人物か？>

原文では「彼らのうちの二人」とあります。彼らはグループの中でも「特別な立場」の弟子たちでした。初代共同体の中でも特にイエスに近い人々で、仲間からも期待されていました。けれども共同体が危機、不安の時に去っていきます。「私たちはだまされた。待っていても仕方ない。何も起こりはしない。」と幻滅して立ち去ります。

「論じ合っていた」「二人は暗い顔をして立ち止まった」などの言葉から、割り切れない思い、後悔の思いを抱えていたことを感じ取れます。

二人は、人生を賭けてイエスについて行ったことを「もう過去のこととして忘れてしまおう」とは思っていません。まだ、苦々しく思っているから口論しています。「どうしてこんなことになったのか？」と原因探して論じ合い、分裂するところまでできていました。期待をかけていた先生が殺される・・・思っても見なかった事態にうろたえていました。

私たちも、福音宣教に生涯をかける意気込みです。けれどもうまく行かないと動揺します。心が乱れ、誰かを非難したくもなります。けれども、司祭として・信徒としてこのように感じるのは、実は本物の証拠です。無責任な人なら、がっかりもせず、何かの気晴らしにさっさと逃げ込めばいいだけの話です。福音を告げることは、動揺したり、疲れたり、戸惑うこととセットになっていることが二人の弟子からもわかります。挫折したり、がっかりすることも、織り込み済みになっていきましよう。

### <イエスのなさり方>

イエスは二人の弟子を励まし慰めるのに、4つのことをしています。①話を聞き、②ショックを与え、③説明し、④最後にパンを割いて二人に奉仕します。

#### 1. 「話を聞く」

「彼らと一緒に歩き始めた」 イエスの方から近づき、歩みを共にされます。そして、しばらくの間、無言で歩調を合わせて歩かれます。二人が語ることを控えめな態度でひたすら聞きます。弟子たちの会話に、イエスは自然に入り込みます。イエスは「私はここにいる。私はイエスだ。私は復活した。私を信じなさい。」とは言いません。「何のことを話しているのですか。なぜ悲しんでいるのですか。どう思っているのですか。」と控えめに尋ねます。

二人は「よそ者のあなただけがこのことを知らないのですか」とぶっきらぼうな態度を取られますが、イエスは気になさいません。無礼を受けても、忍耐と善意で話を聞き続けます。彼らの心の底にある問題を表現するように導きます。

イエスは「大丈夫。苦しいことは忘れなさい。」とは言わないで「なぜ悲しく辛いのか話してごらんなさい。」と言っています。これは非常に大切なことです。なぜなら、聞くことによって、二人がどんな思いでいるのか、言葉で表現させています。彼らはイエスの生涯と死、そして婦人たちの知らせのことも知っています。けれども、全貌を理解できていません。イエスは、弟子たちに話させることで、混乱した、がっかりした思いを説き明かしていきます。このように、イエスの励まし・慰めの第1歩は、「話しをさせること」です。他人を慰めようとする時に、これはとても大切なポイントです。イエスは、心に抱えていることや苦しんでいる原因を自分たちで説明させる機会を与えています。

### <中途半端なケリグマ>

二人の弟子の会話は、驚くべきものです。ルカ福音書は、皮肉を込めて書いています。実は、彼らの会話は、信仰の中心部分(ケリグマ)です。生前イエスが告げていた内容(救いのメッセージ)がそのまま実現されていますが、彼らはそのことに気がつきません。災いのように悲しく告げています。彼らの態度を示す17節のスキュトロポイという言葉はマタイ6:16にも見られます。「断食する時、偽善者のようにくらい顔つきをしてはならない」と言っておられます。だから二人は、葬式のような顔をしていたのです。彼らは、ケリグマを口にしながら、それがケリグマであることを悟らず、逆に取り返しがつかないことが起きた、と受け止めています。これを中途半端なケリグマと呼びます。言葉そのものは、福音であっても、心が伴っていないのです。確信がなければ、福音は人には伝わらない見本です。

### 2. 「ショックを与える」

励まし・慰めるためにイエスがされた2つ目のことは衝撃的です。イエスは弟子たちに「物分かりが悪く、心が鈍く預言者たちに言ったことすべてを信じられない者たち」と言っています。これは理解しづらいことです。慰めてもらいたくて私たちのもとに来る人たちは、自分たちの抱えていることや感じていることをただ認めて欲しいと思っていることが多いものだからです。けれども、慰めてもらいたいと思っている人に、状況を逆転させなければいけない時もあります。人を慰める時に、相手にハッとさせたり、ものの見方を変えさせなければならない場合もあります。

相手は、「かわいそうに、周りの人に分ってもらえなくて、どんなに辛いことでしょう。あなたは間違っていない。私にはどうしたらよいか分からないけれど、お気持ちは分りますよ。」と言ってもらいたがっています。けれど、ショックを与えてチャレンジを求めることもあります。

「あなたは一部は正しいけれど、全部が正しいわけではありません。全体を理解すると見方が変わります。」と言わねばならない場合もあります。イエスは、はじめ二人に優しく接しましたが、彼らにショックを与えます。この2点目が非常に大切です。もちろん、難しい場合もあります。目の前で嘆く相手に「その通りです。お気持ちはよく分りますから、あなたのためにお祈りします。」と言う方が簡単です。でも、それ乗り越えないといけない時もあります。勇気のいることですが…。

### 3. 「説明する」

ショックを与えて、足りないところを分らせた後、イエスは3番目に「説明」します。イエスは、二人が知っていることは、部分的で不十分なことをわからせます。**救い主(メシア)が十字架にか**

かる弱さは、失敗ではなく、“仕える神”を示すご計画であることを、イエスは教えます。あなた方が「失敗」と思うことは、実は「イエスの勝利」だと説明します。イエスが苦しんだのは、預言者たちが語った通り“メシアのしるし”です。

「説明」によって、二人の弟子には心の変化が生じます。「考え方」だけでなく「心」を変えます。二人は、「わたしたちの心は燃えていた」と言っていますが、親切にされたから燃えたのではありません。神の計画がわかって、抱えていた重荷が軽くなって、希望が持てたから燃えたのです。この“心が燃えた体験”が福音宣教の始まりです。

#### 4. 「パンを割いて奉仕する」

正しく「説明」した後、イエスは二人に奉仕しパンを裂きます。そこで二人は、目の前の人が復活したイエスだったと悟ります。イエスは「私は復活した主である。私はあなた方の前にいる。」とは言いません。自分たちで理解させます。話を聞き、ショックを与え、説明し、最後にミサを行うだけです。パンを裂くことで、最後の晩餐で厳かに行ったことを思い出させます。そして、二人の目が開いた“ミサ”が教会で行われます。現在は新型コロナウイルスの影響でミサが行われていませんが、収束した折にまた与れます。

#### 振り返りの質問

Q. エマオの弟子たちの箇所をこれまでどのように受け止めてきたでしょうか？ 新しい発見がありましたか？

Q. これまでの信仰生活の中で、ショックを受けて、心が燃えた体験がありますか？

#### <復活したイエスの現れ方>

復活された主は、控え目で、謙遜に現れています。それには2つの意味があります。

##### 1. 厳しい言葉を浴びせない

イエスは福音書で 13 回、弟子たちに出現しますが、厳しい言葉を言わず、慎ましく優しく現れています。弟子たちが逃げたこと、イエスを否定したこと、見捨てたことに憤りを示したり責めてはいません。イエスの言葉には、友に見捨てられた悲しさは少しもありません。喜びと広い心で弟子たちに現れます。

私たちに同じようなことがおきたら、思わず「悲しい」と言ってしまうでしょう。聖人のパウロ

でさえ、悲しい思いを口にしています。共同体のことでどれほど辛い思いをしたか語っています。Ⅱテモテ4：16～17で、「わたしの最初の弁明のときには、だれも助けてくれませんでした。」この言葉には、孤独にされた非難が含まれています。続けて、「皆わたしを見捨てました。彼らにその責めが負わされませんように。」と言っています。これが偽りのない言葉です。友に見捨てられた苦しみがどんなに大きかったかを窺わせる言葉です。一方、イエスはすべての友に見捨てられましたが、恨みを語っていません。穏やかで柔和に、自分の栄光を喜んで欲しい、と願って現われています。これはイエスがどのように弟子たち、また私たちを慰めるか理解するために大切な点です。

## 2. 慎ましい態度で現れる

イエスは慎ましく控え目に現れます。上から人を押しえつけるような態度は取りません。信じない人を愚か者扱いはしません。その代わりにイエスは“復活のしるし”を与えます。それは、イエスを信じる人は受け入れるしるしですが、他の人が信じなくても咎めはしません。これは言葉では説明しにくいことです。復活したイエスには、神々しい光を放っていたはずですが、だから、公然と人々の前に現れて、“信じないではいられないようなしるし”を与えることもできました。けれども、そうはされませんでした。信じる者にしるしを示しましたが、信じないではいられないような示し方はしませんでした。

### <信じるダイナミクス>

イエス様は、私たちの気持ちに反したことを押しつけようとはしません。私たちの自由を損なうのではなく、自由を応援するのを望んでいます。“信じるためのしるし”を示されますが、私たちの自由を尊重して過度に示すことはしません。神は信じないことなどあり得ないようなやり方で強要することはしません。人の自由意志を尊重してご自分を示されます。

「なぜ復活されたイエス様は、皆が信じるようにたくさんの奇跡を起こさなかったのでしょうか？」これは“信じるダイナミクス”と関係しています。“信じるダイナミクス”は、私たちの自由と尊厳を守りながら信仰へとたどり着くプロセスです。イエス様も自由を尊重し、育み、何も押しつけない神のイメージを示しています。神様は、私たちに強制的に信仰を押しつけません。

神様は、自由な心で信仰を選ぶことを望んでいます。イエス様のやり方は、信じられるように助け、しるしを与えるだけでした。そのしるしは、神を真剣に求める人が神と出会えるように計画されたものでした。

神様は、私たちが自由と真実を求め、信じるプロセスに加わることを望んでいます。

### <私たちにミッションを与える>

復活されたイエス様は、ご自分の姿を現すだけでなく、私たちにミッションを与えています。イエス様は「私はここにいる。私はよみがえった。喜びなさい。」と言うだけでなく「行って宣教し、あなたの使命を果たしなさい。」と言われます。この使命感が、信仰生活でとても大切です。私たちが成長するのは、信仰体験を重ねるだけでなく、使命を与えられるからです。神様は私たちの尊厳を大切にされ、どんな時でも私たちに使命を与えます。いくつになっても「神様はいま私にどんな使命を与えておられるのだろうか？」と、考える必要があります。

使命感を持つことは、健康な時、心身ともに元気な時にはやさしいことです。けれども、弱くなった時、病気や年をとった時には難しくなってきます。けれども、若い時とは異なる方法で自分の人生を神様に、また人々に捧げられます。イエス様は「人生どんな時にも、あなたには、果たすべき使命がある。あなたの働きは、私にとって重要です。あなたは大切なことを成し遂げなくてはならない。私にはあなたが大切です」と言って私たちを励ましてくれます。

私たちは、使命感を持てるように、無力感やフラストレーションに負けないように、熱心に祈らなくてはなりません。「自分はもう役に立たない」という思いは、非常に大きな誘惑です。イエス様が、私たちに具体的な使命を与えてくださるよう祈りましょう。

### 振り返りの質問

Q. 信じることを強制されない、神様のなさり方をどう思いますか？ これまで人にどのように信仰を伝えてきましたか？ 今どのようなミッションを感じていますか？